

環境保全型炭酸ガス施用装置の実用化に向けて

冬季の施設園芸植物は、密閉されたハウス内で生育するため光合成に必要な炭酸ガスが不足しがちになります。そのため灯油やLPガスを燃焼させ、発生した炭酸ガスをハウス内に供給する炭酸ガス施用の技術が一般に用いられています。一方、日本政府は2050年までに脱炭素社会を実現し、温室効果ガスの排出を実質ゼロにすることを目標としています。

このような中、府内のものづくり企業において、大気から回収した炭酸ガスを施用する、パイプハウス等へも設置可能な小型の装置が開発されました。

そこで、当センターでは、本装置を用いた府内施設栽培での利用方法に関する基礎的な知見を得ることを目的とし、イチゴを用いた栽培試験を行っています。



本研究で用いる発生装置



イチゴの生育状況の確認

タバココナジラミバイオタイプQの薬剤感受性検定

タバココナジラミは、吸汁による加害やすす病を誘発させるだけでなく、トマトやキュウリのウイルス病(トマト黄化葉巻病、トマト黄化病、キュウリ退緑黄化病等)を媒介することから、重要な害虫となっています。また、タバココナジラミには形態以外の生物学的特徴が異なるバイオタイプ^{※1}が複数存在し、バイオタイプQは薬剤感受性の低下が報告されています。

そこで、当センターでは、タバココナジラミバイオタイプQに対する薬剤感受性検定^{※2}を行っており、得られた結果は、殺虫剤の選定の参考情報として生産現場に伝え、効率的な防除ができるように支援します。

※1 バイオタイプ：同一種内で、遺伝子や農薬への感受性など異なる形質を持つ系統

※2 薬剤感受性検定：当センターでは、キャベツの葉に24時間産卵させ、14日後に葉を殺虫剤液に漬けて乾かし、10日後に羽化した虫を数える方法で行っています。

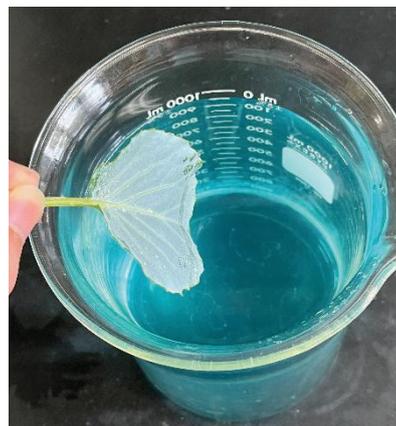


成虫



幼虫

タバココナジラミ



幼虫が寄生したキャベツ葉を殺虫剤液に漬けている様子

試験研究成績報告会・活動報告会を開催

2月28日(水)午後、「国営開発農地における新たな品目の提案」をテーマに、当所試験研究成績報告会及び丹後農業改良普及センター活動報告会を開催し、研究員3名、普及指導員1名が口頭発表しました。

当日は地元生産者をはじめ、関係JAおよび府の職員等30名余りの参加者がありました。発表内容に対しては、「ナシは収穫期が早まることで他品種の収穫、繁忙期が重複せず収益が上がるのはメリットが大きい」、開催方法に対しては、「生産者の発表や学舎OB数名でのディスカッションなど取り入れてみては」との意見をいただきました。

今後も現場に役立つ技術開発に取り組み、その成果を生産者や関係機関に情報発信していきます。



発表者、会場の様子

農林センター(丹後農業研究所)

研究報告会を開催

～てん茶の安定生産を可能にする技術を紹介～

当所は、京都府茶生産協議会と共催により、2月15日に宇治茶会館(宇治市)にて研究報告会を開催しました。本会は、研究成果を速やかに生産者・茶商工業者に普及することで、宇治茶の価値・魅力を向上することを目的として開催し、約200名の茶関係者が出席しました。

当日は、研究成果として、当所の研究員2名から「機械摘みてん茶の省力製茶技術について」「てん茶工場におけるコンタミネーションの影響調査と防止手法の検討」、また京都府立大学から「京都府特産物抹茶原料の副産物である茎を活用した抗菌物質の探索」について報告しました。

会場では、生葉の硬さを簡易・迅速に測定し、その硬さに応じ製茶条件を変えて製茶した茶も展示しました。多くの出席者から、「この技術を早期実用化してほしい」「スライドや話がわかりやすかった」との意見をいただくなど、有意義な研究報告会となりました。今後も茶業関係者に役立つ情報を提供します。



研究報告する当所研究員(左:第1報告、右:第2報告)

第20回京都府豚肉品質向上研究会の開催

当センターでは、京都市中央卸売市場第二市場で2月22日に開催された、京都府養豚協議会主催の「第20回京都府豚肉品質向上研究会」において、飼料や豚肉の分析結果について報告しました。府内外の生産者、流通者など51名の出席があり、岐阜県畜産試験所からは「豚の改良における新技術」について、家畜改良センターからは「豚肉の霜降りに関する新知見と脂肪質の重要性」についての講演が行われました。

意見交換では、各農家の豚肉をしゃぶしゃぶにして食べ比べを行い、生産者ごとの味の違いや柔らかさ、肉汁感などの感想を、生産者が直接、参加者から聞く機会となり、「安全で安心なうまい肉豚」を作るための技術研鑽の場となりました。



講演の様子



京都産の豚肉を試食

養殖アカモクの収穫

2月2日より、養殖アカモクの収穫が宮津市養老地先で始まりました。今期もアカモクの順調に生育し、収穫量は5年連続で10トンを上回る見込みです。収穫作業は3月初旬頃まで継続されます。

2月下旬には、来年度のアカモク種苗生産に向けて、成熟したアカモク母藻から種(幼胚)を採取する作業を実施し、約400万個(約5万本の種苗が生産可能)の幼胚を確保しました。これらを、種苗生産を開始する次年度5月頃まで当センターの冷蔵室で大切に保管します。

養殖された海藻類は二酸化酸素の吸収・貯留源となることから、アカモクの養殖は脱炭素手法としても大きな注目を集めています。アカモクの養殖が食用海藻の生産のみならず、府内の脱炭素の取り組みの一例となるよう、引き続き安定した種苗供給と養殖振興に取り組んでいきます。



水面にたなびくアカモク(収穫期直前)



アカモクの幼胚(倍率20倍)